

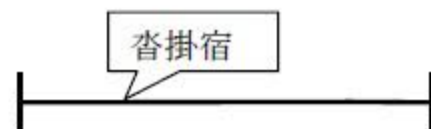


第十九次

沓掛宿

～昔の面影は・・・～

長野県北佐久郡軽井沢町
日本橋から 154.0 キロ
京都まで 378.2 キロ



沓掛宿は軽井沢と追分のほぼ中間地で、また草津道を通じ、物資輸送上では重要地点であった。なお「沓掛」という地名は、全国の峠道に多くみられるもので、坂道にさしかかったところで旅の履き物をあたらしく履き替え、古い沓を山の神にそなえて旅の安全を祈る、という意味がある。

沓掛時次郎



沓掛宿に入る少し手前あたりで、左写真のような鳥居と赤い橋が見えてくる。それが長倉神社である。広い境内がある大きな神社で中には沓掛時次郎の碑がある。沓掛時次郎とは長谷川伸の作品の中の主人公であるが、碑には本当に実在の人物のごとくかかされている。ちなみに内容は「千両万両枉（ま）げない意地も、人情からめば弱くなる。浅間三筋の煙の下で、男沓掛時次郎」というものだ。

また、この右の写真は神社内にある屋根つきの土俵で、昔は結構どこの神社にもあって、相撲大会なるものもあったらしい。しかし、やっぱり現在では使われることもほとんどなくなってきたということだろうか。



リゾート地としての発展とその影

現在でこそリゾート地として発展しているが、昔は全く別の街だった。戦後の大火で宿場の大半が焼失し、復興もされなかったのだ。また、その数年後、「沓掛駅」であった駅名が「中軽井沢駅」に変わり、沓掛の名も失われてしまっている。この宿場町にかつての名残はほとんど見出すことはできず、現在沓掛の名を名乗っているのは長倉神社にある沓掛時次郎の碑のみである。なお、駅の裏には一里塚の跡が残っている。

「沓掛宿」前後の歩みの記録

3/21 15:40 軽井沢宿

？

15:50 隊長たちに遭遇

？

17:45 中軽井沢駅着